「やもめと裁判官のたとえ」

2023年09月27日

それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。まして神は、昼も夜も叫び求める選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでも放っておかれることがあろうか。言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」（ルカ18：6～8）

主イエスは弟子たちに、絶えず祈るべきであり、落胆してはならないことを教えるために、一つの譬えを語られた。ある町に、神を畏れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に一人の貧しいやもめがいた。夫を亡くし、心細く暮らしていたが、弱みに付け込まれ、多大な損害を受けてしまった。その損害を取り戻さないと暮らしていけない。彼女は、裁判官のところに行って、「相手を裁いて、私を守ってください」と懸命に訴えた。裁判官は、悪徳裁判官だったので、やもめの訴えなど気にも止めず、取り合おうともしなかった。しかし、彼女は何度断られても、執拗に裁判官のところに行き、訴え続けた。彼は後になって、「自分は神など畏れないし、人を人とも思わないが、あのやもめは幾度も来て、面倒だから、裁判をしてやろう。ひっきりなしに来て、うるさくてしかたがない」と思い返し、裁判をして、彼女を助けてやった。こう話してから、主イエスは「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。まして神は、昼も夜も叫び求める選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでも放っておかれることがあろうか。言っておくが、神は速やかに裁いてくださる」と言われた。自分のことしか考えない裁判官であっても、「私を守ってください」と繰り返すやもめの求めに応えた。まして、あなたがたを選び、愛する神は、あなたがたの昼夜の叫びに耳を貸さず、放置したままにしておかれることがあろうか。必ず、速やかに正しい裁判をして、あなたがたの求めに応じ、助けてくださる。主イエスは、この不正の裁判官の譬えから、祈っても、応えられないと落胆しないで、絶えず祈りなさいと教えられた。

主イエスは「山上の説教」で、下記のように語っている。「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。叩きなさい。そうすれば、開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、叩く者には開かれる。（マタイ７：７～８）」父親であれば、子どもの欲しがるものを与える。まして、天の父は求める者に良いものを与えてくださると続けている。何と喜ばしい言葉ではないか。求めるものがあるということは生きる希望を持っていることで、また、祈り求める神を知っていることは、もはや顧みられているということではないか。人はしばしば、希望を無くし、祈り求める神を見失う。望みも言葉もなくし、絶望の中に落ち込むことがある。パウロは、その人々の絶望を知り、下記のように書いている。「霊もまた同じように、弱いわたしたちを助けてくださいます。私たちはどう祈るべきかを知りませんが、霊自らが、言葉に表せない呻きをもって執り成してくださるからです。人の心を見極める方は、霊の思いが何であるかを知っておられます。（ローマ８：26～27a）」言葉にならない呻きを霊が執り成し、神に届けてくださる。マルチン・ルターは、下を向き、言葉にならない呻きこそが、神に真っ直ぐに届いていると言っている。主イエスはたゆまず祈れと教えられた。しかし反面、「人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか」と、人間の不信仰を見抜いておられる。霊の執り成しを信じるのが不信仰者の信仰であろう。